SIDSの発生情況と診断基準に関する研究

渡 辺 富 雄（昭和医大・法医）

1．研究目的

SIDSは1979年から国際疾病分類の基本分類表にあげられているが、わが国ではSIDSの実態が把握されていない。しかも、その死亡に窒息や肺炎の診断名が付けられ、社会的弊害も大である。こうした現状から脱皮するために、SIDSの発生情況を疫学的に調査すると共に、診断基準を確立することが急務である。

2．研究方法

本研究グループは、初年度の研究として、乳幼児の突然死に対する従来の医学的認識と今後の方向性について、次の実態調査を行なった。

1）乳児の突然死に関する疫学的調査として、どのような死因が記載されているかを全国的に検討した。

2）乳幼児の変死体の死因がどのように判断されているかを一県警本部の資料について調査した。

3）法医解剖におけるSIDSへの対応がどのようなものであるかを各機関について調査した。

3．研究結果

本研究の成果は、次に述べる研究協力者の報告の通りであり、スローテンポではあるが、SIDS認知傾向にあるといえる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.研究目的

SIDSは1979年から国際疾病分類の基本分類表にあげられているが、わが国ではSIDSの実態が把握されていない。しかも、その死亡に窒息や肺炎の診断名が付けられ、社会的弊害も大である。こうした現状から脱皮するために、SIDSの発生情況を疫学的に調査すると共に、診断基準を確立することが急務である。